

二、三羽——十二、三羽

泉鏡花

青空文庫



引越しをするごとに、「雀はすずめどうしたろう。」もう八十幾いつで、耳が遠かった。——その耳を熟じつと澄ますようにして、目をうつとりと空を視ながめて、火桶ひおけにちよこんと小さくいて、「雀はどうしたろうの。」引越しをするごとに、祖母のそう呟つぶやいたことを覚えている。「祖母おばあさん、一所に越して来ますよ。」当てずっぽに気安めを言うのと、「おお、そうかの。」と目皺めじわを深く、ほくほくと頷うなずいた。

そのなくなつた祖母は、いつも仏の御飯の残りだの、洗いながしのお飯まんまつぶ粒を、小窓に載せて、雀を可愛かわいがつていたのである。

私たちの一向いっこうに気のない事は——はれて雀のものがたり——それで嵐雪らんせつの句は知つていても、今朝も囁ささつた、と心に留めるほどではなかった。が、少すくなからず愛惜あいじやくの念を生じたのは、おなじ麴こうじ町だが、土手三番町に住すまつた頃であつた。春も深く、やがて梅雨も近かつた。……庭に柿の老樹が一株。遣放やりばなしに手入れをしないから、根まわり雑草の生えた飛石とびいしの上を、ちよこちよことよりは、ふよふよと雀が一羽、羽を拡げながら歩行あるしていた。家内がつかつかと跣足はだしで下りた。いけずな女で、確たしかに小雀を認めたらしい。チチチチ、チュ、チュツ、すぐに掌てのひらの中に入った。「引摺ひつつかんじや不可いけない、そつとそつと

。「これが驚か、かなりやだと、伝統的にも世間体にも、それ鳥籠をと、内にはないから買いに出る処だけれど、対手が、のりを舐める代もので、お安く扱われつけているのだから、台所の目簀でその南の縁へ先ず伏せた。——ところで、生捉つて籠に入れると、一時と経たないうちに、すぐに薩摩芋を突ついたり、柿を吸つたりする、目白鳥のように早く人馴れをするのではない。雀の児は容易く餌につかぬと、祖母にも聞いて知っていたから、このまだ草にふらついて、飛べもしない、ひよわなものを、飢えさしてはならない。——きつと親雀が来て餌を飼おう。それには、縁では可恐がるだろう。……で、もとの飛石の上へ伏せ直した。

母鳥は直ぐに来て飛びついた。もう先刻から庭樹の間を、けたたましく鳴きながら、あつちへ飛び、こつちへ飛び、飛騨いでいたのであるから。

障子を開けたままで覗いているのに、仔の可愛さには、邪険な人間に対する恐怖も忘れて、目簀の周囲を二、三尺、はらはらくると廻つて飛ぶ。ツツと簀の目へ嘴を入れたり、颯と引いて横に飛んだり、飛びながら上へ舞立ったり。そのたびに、簀の中の仔雀のあこがれようと言つたらない。あの声がキイと聞えるばかり鳴き縋つて、引切れそうに胸毛を震わす。利かぬ羽を渦にして抱きつこうとするのは、おつかさんが、嘴を簀の目に、

その……ツツと入れては、ツイと引く時である。

見ると、小さな餌を、虫らしい餌を、親は嘴に銜えているのである。箒の中には、乳離れをせぬ嬰兒だ。火のつくように泣立てるのは道理である。ところで箒の目を潜らして、口から口へ哺めるのは——人間の方でもその計略だったのだから——いとも容易い。

だのに、餌を見せながら鳴き叫ばせつつ身を退いて飛廻るのは、あまり利口でない人間にも的確に解せられた。「あかちゃんや、あかちゃんや、うまうまをあげましょう、其処を出ておいで。」と言うのである。他の手に封じられた、仔はどうして、自分で箒が抜けられよう？ 親はどうして、自分で箒を開けられよう？ その思はどうだろう。

私たちは、しみじみ、いとしく可愛くなつたのである。

石も、折箱の蓋も撥飛ばして、箒を開けた。「御免よ。」「御免なさいよ。」と、雀の方より、こつちが顔を見合わせて、悄気げつつ座敷へ引込んだ。

少々極が悪くつて、しばらく、背戸へ顔を出さなかつた。

庭下駄を揃えてあるほどの所帯ではない。玄関の下駄を引抓んで、晩方背戸へ出て、柿の梢の一つ星を見ながら、「あの雀はどうしたろう。」「ありたけの飛石——と言つても五つばかり——を漫に渡ると、湿けた窪地で、すぐ上が葱や苔、竜の髯の石垣の崖になる、

片隅に山吹があつて、こんもりした躑躅が並んで植つていて、垣どなりの灯が、ちらちらと透くほどに二、三輪咲残つた……その茂つた葉の、蔭も深くはない低い枝に、雀が一羽、たよりなげに宿つていた。正に前刻の仔に違いない。…様子が、土から僅か二尺ばかり。これより上へは立てないので、ここまで連れて来た女親が、わりのう預けて行つたものらしい……敢て預けて行つたと言いたい。悪戯を詫びた私たちの心を汲んだ親雀の気の優しさよ。……その親たちの時は何処？……この嬰兒ちゃんは寂しそうだ。

土手の松へは夜鷹が来る。築土の森では木兎が鳴く。……折から宵月の頃であつた。

親雀は、可恐いものの目に触れないように、なるたけ、葉の暗い中に隠したに違いない。もとより藁屑も綿片もあるのではないが、薄月が映すともなしに、ぼっと、その仔雀の身に添つて、霞のような気が籠つて、包んで円く明かつたのは、親の情の臍氣ならず、輪光を顕わした影であろう。「ちよつと。」「何さ。」「手招きをして、「来て見なよ。」「家内を呼出して、両方から、そつと、顔を差寄せると、じつとしたのが、微に黄色な嘴を傾けた。この柔な胸毛の色は、さし覗いたものの襟よりも白かつた。

夜ふかしは何、家業のようだから、その夜はやがて明くるまで、野良猫に注意した。彼奴が後足で立てば届く、低い枝に、預つたからである。

朝寝はしたし、ものに紛れた。<sup>まぎ</sup>午の庭に、<sup>ひる</sup>隈なき五月の日の光を浴びて、<sup>くま</sup>黄金の如く、銀の如く、飛石の上から、柿の幹、<sup>つつじ</sup>躑躅、山吹の上下を、<sup>うえした</sup>二羽縦横に飛んで舞っている。ひらひら、ちらちらと羽が輝いて、三寸、五寸、一尺、二尺、<sup>くさき</sup>草樹の影の伸びるとともに、親雀につれて飛び習う、仔の翼は、次第に、次第に、上へ、上へ、自由に軽くなつて、<sup>う</sup>卵の花垣の丈を切るのが、<sup>はながき</sup>四、五度馴れると見るうちに、<sup>たけ</sup>崖をなぞえに、<sup>がけ</sup>上町

の樹の茂りの中へ飛んで見えなくなつた。  
真綿を黄に染めたような、あの翼が、<sup>すみやか</sup>こう速に飛ぶのに馴れるか。かつ感じつつ、私たちは飽かずに<sup>なが</sup>視めた。

あとで、台所からかけて、女中部屋の北窓の小窓の小縁に、<sup>こえん</sup>行ったり、来たり、<sup>ではい</sup>出入りするの、五、六羽、八、九羽、どれが、その親と仔の二羽だかは紛れて知れない。

——二、三羽、五、六羽、十羽、十二、三羽。ここで雀たちの数を言つたついでに、それぞれ道の、学者方までもない、ちよつとわけ知りの御人に伺いたい事がある。

別の儀でない。雀の一家族は、おなじ場所では余り沢山には殖えないものなのである。うか知ら？ 御存じの通り、<sup>いなづか</sup>稲塚、<sup>いなだ</sup>稲田、<sup>あわきび</sup>栗黍の実る時は、<sup>へいけ</sup>平家の大軍を走らした水鳥<sup>ずどり</sup>ほどの羽音を立てて、<sup>はおと</sup>暇行き、<sup>なわてゆ</sup>畔行くものを驚かす、<sup>あぜゆ</sup>夥多しい群団をなす。鳴子<sup>なるこ</sup>

も引板も、半ば——これがための備だと思ふ。むかしのもの語にも、年月の経る間には、おなじ背戸に、孫も彦も群るはずだし、第一棕鳥と塙を賭けて戦う時の、雀の軍勢を思いたい。よしそれは別として、長年の間には、もう些と家族が栄えようと思ふのに、十年一日と言うが、実際、——その土手三番町を、やがて、いまの家へ越してから十四、五年になる。——あの時、雀の親子の情に、いとしさを知って以来、申出るほどの、さしたる御馳走でもないけれど、お飯粒の少々は毎日欠かさず撒いて置く。たとえば旅行をする時でも、……「火の用心」と、「雀君を頼むよ」……だけは、留守へ言つて置くくらいだが、さて、何年にも、ちよつと来て二羽三羽、五、六羽、総勢すぐつて十二、三羽より数が殖えない。長者でもないくせに、俵で扶持をしないからだ、と言われればそれまでだけれど、何、私だつて、もう十羽殖えたぐらいは、それだけ御馳走を増すつもりでいるのに。

何も、雀に託けて身代の伸びない愚痴を言うのではない。また……別に雀の数の多くなる事ばかりを望むのではないのであるが、春に、秋に、現に目に見えて五、六羽ずつは親の連れて来る子の殖えるのが分っているから、いつも同じほどの数なのは、何処へ行つて、どうするのだろうと思うからである。



が、どうも様子が、仔雀が一羽だちの出来るのを待って、その小児こどもだけを宿に残して、親雀はねぐら時をかえるらしく思われる。

あの、仔雀が、チイチイと、ありッたけくちばし嘴を赤く開けて、クリスマスに貰もらったマントのように小羽を動かし、胸毛をふふよと揺ゆるがせて、こう仰向あおもむいて強請ねだると、あいよ、と言った顔色かおつきで、チチツ、チチツと幾度いくたびもお飯まんまつぶ粒を嘴から含めて遣やる。……食べても強請ねだる。ふくめつつ、後あとねだりをするのを機掛きかけに、一粒銜くわえて、お母さんは堀へいの上——  
 (椿つばきの枝下えだしたで茲ここにお飯まんまが置いてある)——其処そこから、裏露地を切つて、向うの瓦屋根かわらやねへフツと飛ぶ。とあとから仔雀がふわりと縋すがる。これで、羽を馴ならすらしい。また一組は、おなじく餌えを含んで、親雀が、狭い庭を、手水鉢ちようずばちの高さぐらいに舞まい上あがると、その胸のあたりへ附着くつつくように仔雀が飛上とびあがる。尾を地へ着けないで、舞いつつ、飛びつつ、庭中かけまわを翔廻りなどもする、やつぱり羽を馴ならすらしい。この舞踏いっときが一齊みくみに三組も四組もはじまる事がある。卯の花を搔かき乱みだし、萩はぎの花を散らして狂う。……かわいいのに目がないから、春も秋も一いっしよ所だが、晴の遊戯あそびだ。もう少しと、綺麗きれな窓掛まどかけ、絨毯じゅうたんを飾つても遣やりたいが、庭が狭いから、羽とともに散りこぼれる風情ふぜいの花は沢山ない。かえつて羽について来るか、嘴くちばしから落すか、植えない堇すみれの紫が一ひとつもと本咲いたり、蓼たでが穂を紅あからめる。

ところで、何のなかでも、親は甘いもの、仔はずるく甘ツたれるもので。……あの胸毛の白いのが、見ていると、そのうちに立派に自分で餌が拾えるようになる。澄ました面で、コツンなどと高慢に食べている。いたずらものが、二、三羽、親の目を抜いて飛んで来て、チュツチュツチュツとつき合の喧嘩さえ遣る。生意気にもかかわらず、親雀がスーッと来て叱るような顔をする、喧嘩の嘴も、生意気な羽も、忽ちぐにやぐにやになって、チイチイ、赤坊声で甘つたれて、餌を頂戴と、口を張開いて胸毛をふわふわとして待構える。チチツ、チチツ、一人でお食べなど言つても肯かない。頬辺を横に振つても肯かない。で、チイチイチイ……おなかが空いたの。……おお、よしよし、と言つた工合に、この親馬鹿が、すぐにのろくなつて、お飯粒の白い処を——贅沢な奴らで、内のは挽割麦を交ぜるのだがよほど腹がすかないと麦の方へは嘴をつけぬ。此奴ら、大地震の時は弱つたぞ——啄んで、嘴で、仔の口へ、押込み揉込むようにするのが、凡そ堪らないと言つた形で、頬摺りをするように見える。

怪しからず、親に苦勞を掛ける。……そのくせ、他愛のないもので、陽氣がよくて、お腹かくちいと、うとうとなつて居睡をする。……さあさあ一きり露台へ出ようか、で、塀の上から、揃つてもの干へ出たとお思いなさい。日のほかほかと一面に当る中に、

声は噪ぎ、影は踊る。

すてきに物干が賑だから、密と寄つて、隅の本箱の横、二階裏の肘掛窓から、まぶしい目をぱちくりと遣つて覗くと、柱からも、横木からも、頭の上の小廂からも、暖かな影を湧かし、羽を光らして、一斉にパツと逃げた。――飛ぶのは早い、裏邸の大枇杷の樹までさしわたし五十間ばかりを瞬く間もない。――（この枇杷の樹が、馴染の家族の塹なので、前通りの五本ばかりの桜の樹（有島家）にも一群衆を食っているのであるが、その組は私の内へは来ないらしい、持場が違ふと見える）――時に、女中がいけぞんざいに、取込む時引外したままの掛棹が、斜違いに落ちていた。硝子一重すぐ鼻の前に、一羽可愛いのが真正面に、ぼかんと留まつて残っている。――どうかして座敷へ飛込んで戸惑いするのを掴えると、掌で暴れるから、このくらい、しみじみと雀の顔を見た事はない。ふつくりとも、ほつかりとも、細い毛へ一つずつ日光を吸込んで、お、お前さんは飴で出来ているのではないかい、と言いたいほど、とろんとして、目を眠っている。道理こそ、人の目と、その嘴と打撞りそうなのに驚きもしない、と見るうちに、蹈えて留つた小さな脚がひよいと片脚、幾度も下へ離れて迂りかかると、その時はビクリと居直る。……煩つて動けないか、怪我をしていないかな。……

以前、あしかけ四年ばかり、相州逗子に住った時（三太郎）と名づけて目白鳥がいた。

桜山さくらやまに生れたのを、おとりで捕った人に貰ったのであった。が、何処どこの巢ねにいて覚えてたろう、鶇ひよ、駒鳥こまどり、あの辺にはよくいる頬白ほおしろ、何でも囀さえずる……ほうほけきよ、ほけきよ、ほけきよ、明かに鶯あきらの声を鳴いた。目白鳥としては駄鳥だちようかどうかは知らないが、私には大の、ご秘蔵——長屋の破軒やぶれのきに、水を飲ませて、芋で飼ったのだから、笑って故と（ご）の字をつけておく——またよく馴れて、殿様が鷹たかを据すえた格で、掌てのひらに置いて、それと見せると、パツと飛んで虫を退治たいじした。また、冬の日のわびしさに、紅椿べにつばきの花を炬燵こたつへ乗せて、籠を開けると、花を被かぶつて、密を吸いつつ嘴くちばしを真黄色まっさいろにして、掛蒲団かけぶとんの上を押廻おしまわった。三味線さんみせんを弾いて聞かせると、音に競きそつて軒で高囀たかさえずりする。寂しい日に客が来て話をし出すと障子の外で負けまじと鳴きしきる。可愛いもので。……可愛いにつけて、断じて籠には置くまい。秋雨あきさめのしよぼしよぼと降るさみしい日、無事なようにと願ねがい申して、岩殿寺いわとのでらの観音かんのんの山へ放した時は、煩わづらっていた家内と二人、悄然しょうぜん然として、ツイーツイーと梢こすえを低く坂下りに樹を伝つて慕したい寄る声を聞いて、ほろりとし

て、一人は袖そでを濡らして帰った。が、——その目白鳥の事で。……（寒い風だよ、ちよぼいちかぜ）  
 一風は、しわりごわりと吹いて来る）と田越村たごえむら一番の若衆わかいしゅうが、泣声を立てる、大根の煮える、富士おろし、西北風なほらいの烈しい夕暮に、いそがしいのと、寒いのに、向うみずに、がたりと、門かどの戸をしめた勢いきおいで、軒に釣った鳥籠をぐわたり、ボタンと撥返はねかえした。アツと思うと、中の目白鳥は、羽ばたきもせず、横木を転げて、落葉の挟はさまったように落ちて縮んでいる。「しまった、……三太郎が目をまわした。」「まあ、大変ね。」と襷たすきがけのまま庖丁ほうちようを、投げ出して、目白鳥を掌てのひらに取って据えた婦おんなは目に一杯涙を溜ためて、「どうしましょう。」「そ、その時だ。試こころみに手水鉢ちようずばちの水を柄杓ひしゃくで切つて霰しずくにして、露つゆにして、目白鳥の嘴くちばしを開けて含えまして、襟えりをあけて、膚はだにつけて暖めて、しばらくすると、ひくひくと動き出した。ああ助たすかりました。御利益ごりやくと、岩殿いわとのの方かたへ籠を開いて、中へ入れると、あわれや、横木へつかまり得ない。おつこちるのが可恐こわいのか、隅の、隅の、狭い処ところで小さくなった。あくる日一日は、些ちと、ご悩氣のうけと言つた形で、摺餅すりえくちばしに嘴のあとを、ほんの筋ほどつけたばかり。但ただし完全に蘇生よみがえった。

この経験がある。

水でも飲まして遣やりたいと、障子を開けると、その音に、怪我けが処ところが、わんぱくに、しか

も二つばかり廻つて飛んだ。仔雀は、うとりうとりと居睡いねむりをしていたのであつた。……憎くない。

尤もなかなかの悪戯いたずらもので、逗子ずしの三太郎……その目白鳥——がお茶の子だから雀の口真似くちまねをした所為せいでもあるまいが、日向ひなたの縁えんに出して人のいない時は、籠のまわりが雀どもの足跡だらけ。秋晴あきばれの或日あるひ、裏庭の茅葺かやぶき小屋の風呂の廂ひさしへ、向うへ桜山さくらやまを見せ掛けて置くと、午少し前の、いい天気で、閑な折から、雀が一羽、……丁ど目白鳥の上の廂合ひあわいの樋竹といだけの中へすぽりと入つて、ちよつと黒い頭だけ出して、上から籠を覗のぞ込む。嘴はしに小さな芋虫いもむしを一つ銜くわえ、あつち向いて、こつち向いて、ひよいひよいと見せびらかすと、籠の中のは、恋人から来た玉章たますさほどに欲しがって駈上かけあがり飛上とびあがつて取ろうとすると、ひよいと面を横かおにして、また、ちよいちよいと見せびらかす。いや、いけずなお転婆てんばで。……ところがはずみに掛かつて振つた拍子ひょうしに、その芋虫をポタリと籠の目へ、落したから可笑おかしい。目白鳥は澄まして、ペロリと退治たいじた。吃驚びっくり仰天ぎやうてんした顔をしたが、ぽんと樋といの口を突出つきだされたように飛んだもの。

瓢箪ひょうたんに宿る山雀やまがら、と言う謡うたがある。雀は樋の中がすきらしい。五、六羽、また、七、八羽、横にずらりと並んで、顔を出しているのが常である。

或<sup>ある</sup>殿<sup>どの</sup>が領<sup>り</sup>分<sup>よう</sup>巡<sup>めぐ</sup>回<sup>り</sup>の途中、菊の咲いた百姓家に床<sup>しょうぎ</sup>几<sup>ぎ</sup>を据<sup>す</sup>えると、背<sup>せ</sup>戸<sup>ど</sup>畑<sup>はたけ</sup>の梅の枝

に、大<sup>おお</sup>な瓢<sup>ひょう</sup>箆<sup>おき</sup>が釣<sup>つる</sup>してある。梅<sup>うめ</sup>見<sup>み</sup>と言う時<sup>とき</sup>節<sup>ふし</sup>でない。

「これよ、……あの、瓢<sup>ひょう</sup>箆<sup>おき</sup>は何に致<sup>いた</sup>すのじやな。」

その農<sup>のう</sup>家<sup>か</sup>の親<sup>おや</sup>仁<sup>じ</sup>が、

「へいへい、山雀の宿にござります。」

「ああ、風<sup>ふう</sup>情<sup>ぜい</sup>なものじやの。」

能<sup>のう</sup>の狂<sup>きやう</sup>言<sup>ごん</sup>の小<sup>こ</sup>舞<sup>まい</sup>の謡<sup>うたい</sup>に、

いたいけしたるものあり。張<sup>はり</sup>子<sup>こ</sup>の顔<sup>かほ</sup>や、練<sup>ね</sup>稚<sup>ち</sup>児<sup>ご</sup>。しゆくしや結<sup>むす</sup>びに、ささ結<sup>むす</sup>び、や

ましな結<sup>むす</sup>びに風<sup>かぜ</sup>車<sup>くるま</sup>。瓢<sup>ひょう</sup>箆<sup>おき</sup>に宿<sup>しゆく</sup>る山雀、胡<sup>こ</sup>桃<sup>もも</sup>にふける友<sup>とも</sup>鳥<sup>どり</sup>……

「いまはじめて相<sup>あい</sup>分<sup>わか</sup>つた。——些<sup>ち</sup>少<sup>と</sup>じやが餌<sup>え</sup>の料<sup>りょう</sup>を取<sup>と</sup>らせよう。」

こはるうららかに小<sup>こ</sup>春<sup>はる</sup>の麗<sup>うつく</sup>な話<sup>はなし</sup>がある。

御<sup>ご</sup>前<sup>ぜん</sup>のお目<sup>め</sup>にとまつた、謡<sup>うたい</sup>のままの山雀は、瓢<sup>ひょう</sup>箆<sup>おき</sup>を宿とする。こちとらの雀は、棟<sup>むね</sup>割<sup>わり</sup>

長<sup>なが</sup>屋<sup>や</sup>で、樋<sup>とい</sup>竹<sup>だけ</sup>の相<sup>あい</sup>借<sup>じやく</sup>家<sup>か</sup>だ。

腹<sup>はら</sup>が空<sup>くう</sup>くと、電<sup>でん</sup>信<sup>しん</sup>の針<sup>はり</sup>がねに一座<sup>いざ</sup>ずらりと出<sup>で</sup>て、ぽちぽちぽちと中<sup>なか</sup>空<sup>ぞら</sup>高<sup>たか</sup>く順<sup>じゆん</sup>に並<sup>なら</sup>ぶ。

中<sup>ちゆう</sup>でも音<sup>おん</sup>頭<sup>とう</sup>取<sup>とり</sup>が、電<sup>でん</sup>柱<sup>ちゆう</sup>の頂<sup>てい</sup>辺<sup>ぺん</sup>に一<sup>いっ</sup>羽<sup>つ</sup>留<sup>とま</sup>つて、チイと鳴<sup>な</sup>く。これを合<sup>いっ</sup>図<sup>と</sup>に、一<sup>いっ</sup>斉<sup>とき</sup>にチ

イと鳴出す。——塀と枇杷の樹の間に当つて。で御飯をくれろと、催促をするのである。

私が即ち取次いで、

「催促てるよ、催促てるよ。」

「せわしないのね。……煩いよ。」

などと言いながら、茶碗に装つて、婦たちは露地へ廻る。これがこのうえ後れると、勇

悍なのが一羽押寄せる。馬に乗った勢で、小庭を縁側へ飛上つて、ちよん、ちよん、

ちよんちよんと、雀あるきに扉を抜けて台所へ入つて、お竈の前を廻るかと思うと、上の

引きまど  
引窓へパツと飛ぶ。

「些と自分でもお働き、虫を取るんだよ。」

何も、肯分けるのでもあるまいが、言の下に、萩の小枝を、花の中へすらすら、葉の上

はさらさら……あの撓々とした細い枝へ、塀の上、椿の樹からトンと下りると、下りた

なりにすつと這つて、ちよつと末を余して垂下る。すぐに、くるりと腹を見せて、葉裏

を潜つてひよいと攀じると、また一羽が、おなじように塀の上からトンと下りる。下りる

と、すつと枝に撓つて、ぶら下るかと思うと、翻然と伝う。また一羽が待兼ねてトンと下

りる。一株の萩を、五、六羽で、ゆさゆさ揺つて、盛の時は花もこぼさず、嘴で銜えたり、



尾で跳ねたり、横顔で覗いたり、かくして、裏おもて、虫を漁りつつ、滑稽けてはずんで、ストンと落ちるかすると、羽をひらひらと宙へ踊って、小枝の尖へひよいと乗る。

水上さんがこれを聞いて、莞爾して勧めた。

「鞆鞆を拵えてお遣なさい。」

邸の庭が広いから、直ぐにここへ気がついた。私たちは思いも寄らなかつた。糸で杉

箸を結えて、その萩の枝に釣つた。……この趣を乗気で饒舌ると、雀の興行をするよう

だから見合わせる。が、鞆鞆に乗って、瓢箪ぶつくりこ、なぞは何でもない。時とする

と、塀の上に、いま睦じく二羽啄んでいたと思う。その一羽が、忽然として姿を隠す。

飛びもしないのに、おやおやと人間の目にも隠れるのを、……こう捜すと、いまいた塀の

笠木の、すぐ裏へ、頭を揉込むようにして縦に附着いているのである。脚がかりもないの

に巧なもので。——そうすると、見失つた友の一羽が、怪訝な様子で、チチと鳴き鳴き、

其処らを覗くが、その笠木のちよつとした出張りの咽に、頭が附着いているのだから、ど

つちを覗いても、上からでは目に附かない。チチツ、チチツと少時捜して、パツと枇杷

の樹へ飛んで帰ると、そのあとで、密と頭を半分出してきよろきよと見ながら、嬉しそ

うに、羽を揺つて後から颯と飛んで行く。……惟うに、人の子のするかくれんぼである。

さて、こうたわいもない事を言っているうちに——前刻言つた——仔どもが育つて、ひとりだち、ひとり遊びが出来ると、胸毛の白いのばかりを残して、親雀は何処へ飛ぶのかいなくなる。数は増しもせず、減りもせず、同じく十五、六羽どまりで、そのうちには、芽が葉になり、葉が花に、花が実になり、雀の咽が黒くなる。年々二、三度おんなじなのである。

……妙な事は、いま言つた、萩また椿、朝顔の花、露草などは、枝にも蔓にも馴れ馴染んでいらしい……と言うよりは、親雀から教えられているらしい。——が、見馴れぬものが少しでもあると、可恐がつて近づかぬ。一日でも二日でも遠くの方へ退いている。尤も、時にはこつちから、故とおいでの際を御免蒙る事がある。物干へ蒲団を干す時である。

お嬢さん、お坊ちゃんたち、一家揃つて、いい心持になつて、ふつくりと、蒲団に団欒を試みるのだから堪らない。ぼとぼと、あとが、ふんだらけ。これには弱る。そこで工夫をして、他所から頂戴して貯えている豹の皮を釣つて置く。と枇杷の宿にいくまつて、裏屋根へ来るのさえ、おつかなびつくり、（坊主びつくり貂の皮）だから面白い。が、一夏縁日で、月見草を買つて来て、萩の傍へ植えた事がある。夕月に、あの

花が露を香におわせてぱツと咲くと、いつもこの黄たそがれ昏あやには、一時留ひとときとまり餌えに騒さわぐのに、ひそまり返かへつて一羽いちうだつて飛とんで来きない。はじめは怪あやしんだが、二日ふたひめ三日さんひめには心こころ着つくいた。意い気き地じなし、臆おそ病びょう。鳥からす瓜うり、夕顔ゆげなどは分わかけても知ち己かづだろうのに、はじめはて咲さいた月見草つきくさの黄色きいろな花はなが可こ恐おそいらしい……可かわ哀い相そうだから植う替かえようかと、言ううちに、四日よひめの夕暮ゆぐ頃から、漸やつと出でて来きた。何、一度味あじをしめると飛とつといて露つゆも吸すいかねぬ。

まだある。土手どてさんばんちよう三番町さんぱんちようの事ことを言いつた時とき、卵うの花垣はながきをなどと、少々調子ひとえだに乗のつたようだけれど、まったくその庭にわに咲さいていた。土地ちでは珍めづしいから、引越ひ越えす時とき一ひと枝えだ折おつて来きてさし芽こゝろにしたのが、次第たけに丈たけたく生お立いたちはしたが、葉はばかり茂さかつて、蕾つぼみを持もたない。丁ちようど十年目じふねんめに、一昨年いっさくねんの卯月うづきの末すえにはじめて咲さいた。それも塀ひを高く越こした日ひ当あたり一ひと枝えだだけ真白まへくに咲さくと、その朝あしたから雀すずめがバツタリ。意い気き地じなし。また丁ちようどその卵うの花はなの枝えだの下したに御飯おまんまが乗のつていいる。前年ぜんねんの月見草つきくさで心得こころえて、この時ときは澄すみましていた。やがて一羽いちうずつ密そつと来きた。忽たちまち卵うの花はなに遊あそぶこと萩たむむに戯たわむるが如ごとしである。花はなの白しろいのにさおえ怯おびえるのであるから、雪ゆきの降ふつた朝あしたの臆おそ病びょう思おもうべしで、枇び杷わ塚づかと言いいたい、むこうの真白まへくの木きの丘かみに埋うづもれて、声こゑさえ立たてないで可あわれ哀なである。

椿つばきの葉はを払はつても、飛石とこしの上うへを搔かき分わけても、物干もの干ほに雪ゆきの溶とけかかかつた処ところへ餌えを見みせても

影を見せない。炎天、日盛ひざかりの電車道でんしゃみちには、焦こげるような砂を浴びて、蟪蛄とうろうの斧おのと言った強いのが普通だのに、これはどうしたものであろう。……はじめ、ここへ引越したてに、一、二年いた雀は、雪なんぞは驚かなかつた。山を兎うさぎが飛ぶように、雪を蓑みのにして、吹雪を散らして翔かけたものを――

ここだと思う。その児こ、その孫、二代三代に到つて、次第おくり、追続おいつぎに、おなじ血筋ながら、いつか、黄色な花、白い花、雪などに対する、親雀の申しふくめが消えるのであろうと思う。

泰西たいせいの諸国にて、その公園に群むらる雀は、パンに馴れて、人の掌てのひらにも帽子にも遊ぶと聞く。

何故なぜに、わが背戸せどの雀は、見馴れない花の色をさえ恐るるのであろう。実に花なればこそ、些ちつとでも変つた人間の顔には、渠かれらは大なる用心をしなければならぬ。不意つひの礫つぶての戸に当る事幾度いくたびぞ。思いも寄らぬ蜜柑みかんの皮、梨の核しんの、雨落あまおち、鉢前はちまえに飛ぶのは数しばしば々である。

牛乳屋ちちやが露地へ入れば驚き、酒屋の小僧が「今日こんにちは」を叫べば逃げ、大工が来たと見ればすくみ、屋根屋が来ればひそみ、畳屋たたみやが来ても寄りつかない。

いつかは、何かの新聞で、東海道の何某は雀うちの老手である。並木づたいに御油から赤坂まで行く間に、雀の獲もの約一千を下らないと言うのを見て戦慄した。

空気銃を取って、日曜の朝、ここの露地口に立つ、狩猟服の若い紳士たちは、失礼ながら、犬ころしに見える。

去年の暮にも、隣家の少年が空気銃を求め得て高く捧げて歩行した。隣家の少年では防ぎがたい。おつかいものは、ただ煎餅の袋だけれども、雀のために、うちの小母さんが折入って頼んだ。

親たちが笑って、

「お宅の雀を狙えば、銃を没収すると言う約条ずみです。」

かつて、北越、俱利伽羅を汽車で通った時、峠の駅の屋根に、車のとどろくにも驚かず、雀の日光に浴しつつ、屋根を自在に、樋の宿に出入りするのを見て、谷に咲残った撫子にも、火牛の修羅の巷を忘れた。——古戦場を忘れたのが可いのではない。忘れさせたのが雀なのである。

モウパッサンが普仏戦争を題材にした一篇の読みだしは、「巴里は包围されて飢えつつ悶えている。屋根の上に雀も少くなり、下水の埃も少くなった。」と言うのではなかった

か。

雪の時は——見馴れぬ花の、それとは違つて、天地を包む雪であるから、もしこれに恐れたとなると、雀のためには、大地震以上の天変である。東京のは早く消えるから可いものの、五日十日積るのにはどうするだろう。半歳雪に埋もる国もある。

或<sup>あるとき</sup>時も、また雪のために一日形<sup>かたち</sup>を見せないから、……真<sup>ほんとう</sup>個の事だが案じていると、次の朝の事である。ツイ——と寂しそうに鳴いて、目白鳥<sup>めじろ</sup>が唯一羽<sup>ただ</sup>、雪を被<sup>かつ</sup>いで、紅に咲いた一輪<sup>かんづばき</sup>、寒椿の花に来て、ちらちらと羽も尾も白くしながら枝を潜<sup>くぐ</sup>つた。

炬燵<sup>こたつ</sup>から見ていると、しばらくすると、雀が一羽、パツと来て、おなじ枝に、花の上<sup>うへ</sup>を下を、一<sup>いっしょ</sup>所に廻<sup>まわ</sup>つた。続いて三羽五羽、一<sup>いっしょ</sup>齊<sup>とき</sup>に皆来た。御飯<sup>おまんま</sup>はすぐ嘴<sup>くちばし</sup>の下にある。パツパ、チイチイ諸<sup>もろ</sup>きおいに歓喜の声を上げて、踊りながら、飛びながら、啄<sup>ついば</sup>むと、今度は目白鳥が中<sup>まじ</sup>へ交<sup>まじ</sup>つた。雀同志は、突<sup>つつきあ</sup>合<sup>あ</sup>つて、先を争つて狂つても、その目白鳥にはおとなしく優しくかつた。そして目白鳥は、欲しそうに、不思議そうに、雀の飯<sup>い</sup>を視<sup>なが</sup>めていた。私は何故<sup>なぜ</sup>か涙ぐんだ。

優しい目白鳥は、花の蜜に恵まれよう。——親のない雀は、うつくしく愛らしい小鳥に、教えられ、導かれて、雪の不安を忘れたのである。

それにつけても、親雀は何処へ行く。――

――去年七月の末であつた。……余り暑いので、愚に返つて、こうどうも、おお暑いであつては不可い。小児の時は、日盛に蜻蛉を釣つたと、炎天に打つかる気で、そのまま日盛を散歩した。

その気のついでに、……何となく、そこいら屋敷町の垣根を探して（ごんごんごま）が見たかつたのである。この名からして小児で可い。――私は大好きだ。スズメノエンドウ、スズメウリ、スズメノヒエ、姫百合、姫萩、姫紫苑、姫菊の藹たけた称に對して、スズメの名のつく一列の雑草の中に、このごんごんごまを、私はひそかに「スズメの蠟」と称して、内々鼻根でいる。

分けて、盂蘭盆のその月は、墓詣の田舎道、寺つづきの草垣に、線香を片手に、このスズメの蠟燭、ごんごんごまを摘んだ思出の可懷さがある。

しかもそのくせ、卑怯にも片陰を拾ひ拾ひ小さな社の境内だの、心当の、邸の垣根を覗いたが、前年の生垣も煉瓦にかわつたのが多い。――清水谷の奥まで掃除が届く。――梅雨の頃は、闇黒に月の影がさしたほど、あつちこつちに目に着いた紫陽花

も、この二、三年こつちもう少い。——荷車のあとには芽ぐんでも、自動車の轍の下には生えまいから、いまは車前草さえ直ぐには見ようたつて間に合わない。

で、何処でも、あの、珊瑚を木乃伊にしたような、ごんごんごまは見当らなかつた。——ないものねだりで、なお欲い、歩行くうちに汗を流した。

場所は言うまい。が、向うに森が見えて、樹の茂った坂がある。……私が覚えてからも、むかし道中の茶屋旅籠のような、中庭を行抜けに、土間へ腰を掛けさせる天麩羅茶漬の店があつた。——その坂を下りかかる片側に、坂なりに落込んだ空溝の広いのがあつて、道には破朽ちた柵が結つてある。その空溝を隔てた、葎をそのまま斜違いに下る藪垣を、むこう裏から這つて、茂つて、またたとえば、瑪瑙で刻んだ、ささ蟹のようなスズメの蠟燭が見つかつた。

つかまえて支えて、乗出しても、溝に隔てられて手が届かなかつた。

ステッキえ杖の柄で搔寄せようとするが、迂る。——がさがさと遣つていると、目の下の枝折戸から——こんな処に出入口があつたかと思う——葎戸の扉を明けて、円々と肥つた、でつぷり漢が仰向いて出た。きびらの洗いざらし、漆紋の元げたのを被たが、肥つて大いから、手足も腹もぬつと露出で、ちゃんちゃんを被つたように見える、逞ましい肥大



漢の柄に似合わず、おだやかな、柔和な声して、

「何か、おとしものでもなされたか、拾つてあげましようかな。」

と言つた。四十くらいの年配である。

私は一応挨拶をして、わけを言わなければならなかつた。

「ははあ、ごんごんごま、……お薬用か、何か禁厭にでもなりますので？」

とにかく、路傍だし、埃がしている。裏の崖境には、清浄なのが沢山あるから、

御休息かたがた。で、ものの言いぶりと人のいい顔色が、気を隔かせなければ、遠慮も

させなかつた。

「丁ど午睡時、徒然でおります。」

導かるるまま、折戸を入ると、そんなに広いと言うではないが、谷間の一軒家と言つた

形で、三方が高台の森、林に包まれた、ゆつくりした荒れた庭で、むこうに座敷の、縁が

涼しく、油蟬の中に閑寂に見えた。私はちよつと其処へ掛けて、会釈で済ますつもり

だったが、古畳で暑くるしい、せめてのおもてなしと、竹のずんど切の花活を持って、

庭へ出直すと台所の前あたり、井戸があつて、撥釣瓶の、釣瓶が、虚空へ飛んで猿のよ

うに撥ねていた。傍に青芒が一叢生茂り、桔梗の早咲の花が二、三輪、ただ

初々しく咲いたのを、茗と一枝、三筋ばかり青芒を取添えて、竹筒に挿して、のつしりとした腰つきで、井戸から撥釣瓶でぎぶりと汲上げ、片手の水差に汲んで、桔梗に灌いで、胸はだかりに提げた処は、腹まで毛だらけだったが、床へ据えて、円い手で、枝ぶりをちよつと撓めた形は、悠揚として、そして軽い手際で、きちんと極った。掛物も何も見えぬ。が、唯その桔梗の一輪が紫の星の照らすように据ったのである。この待遇のために、私は、縁を座敷へ進まなければならなかった。

「鹿茶を一つ献じましょう。何事も御覧の通りの侘住居で。……あの、茶道具を、これへな。」

と言うと、次の間の——崖の草のすぐ覗く——竹簀子の濡縁に、むこうむきに端居して……いま私の入った時、一度ていねいに、お時誼をしたまま、うしろ姿で、ちらりと赤い小さなもの、年紀ごろで視て勿論お手玉ではない、糠袋か何ぞせつせと縫つていた。……島田鬚の艶々しい、きやしやな、色白な女が立つて手伝つて、——肥大漢と二人して、やがて焜炉を縁側へ。……焚つけを入れて、炭を継いで、土瓶を掛けて、茶盆を並べて、それから、扇子ではたはたと焜炉の火口を煽ぎはじめた。

「あれに沢山ございます、あの、茂りました処に。」

「滝でも落ちそうな崖です——こんな町中に、あろうとは思われません。御閑静で実に結構です。霧が湧いたように見えますのは。」

「烏からすうり 瓜うり でございます。下した 闇やみ で暗がりでありますから、日中から、一杯咲きます。――

――あすこは、いくらでも、ごんごんごまがございますでな。貴方あなた は何とかおつしやいましたな、スズメの蠟燭ろうそく。」

これよりして、私は、茶の煮える間ま と言うもの、およそこの編へん に記した雀の可愛さをここで話したのである。時々微笑ほほえ んでは振向ふりむ いて聞く。娘か、若い妻か、あるいは妾おめいもの か。世に美しい女の状さま に、一つはうかうか誘さそ われて、気の発奮はげ んだ事は言うまでもない。

さて幾度か、茶をかえた。

「これを御縁に。」

「勿論かさねまして、頃このころ 日に。――では、失礼。」

「ああ、しばらく。……これは、貴方あなた 、おめしものが。」

……心こころづ 着くと、おめしものも気恥きはずか しい、浴衣ゆかた だが、うしろの縫ぬい めが、しかも、したたか綻ほころ びていたのである。

「ここもとは茅屋あばらや でも、田舎道ではありませんじや。尻端折しりばしより ……飛んでもない。……

ああ、あんた、ちよつと繕つておあげ申せ。」

「はい。」

すぐに美人が、手の針は、まつげにこぼれて、目に見えぬが、糸は優しく、皓齒にスツと含まれた。

「あなた……」

「ああ、これ、紅い糸で縫えるものかな。」

「あれ——おほほほ。」

私がのつそりと突立つた裾へ、女の脊筋が絡つたようになって、右に左に、肩を曲ると、居勝手が悪く、白い指がちらちら乱れる。

「恐縮です、何ともどうも。」

「こう三人と言うもの附着いたのでは、第一私がこの肥体じゃ。お暑さが堪らんわい。衣服をお脱ぎなさつて。……ささ、それが早い。——御遠慮があつてはならぬ——が、お身に合いそうな着替はなしじゃ。……これは、一つ、亭主が素裸に相成りましょう。それならばお心安い。」

きびらを剥いで、すつぱりと脱ぎ放した。畚褌の肥大裸体で、

「それ、貴方。あなた……お脱ぎなすつて。」

と毛むくじやらの大胡座おおあぐらを搔く。

呆氣あつけに取られて立たちすくむと、

「おお、これ、あんた、あんたも衣きものを脱ぎなさい。みな裸体はだかじゃ。そうすればお客人の遠慮えんりょがのうなる。……ははははは、それが何より。さ、脱ぎなさい脱ぎなさい。」

串戯じょうだんにしてみと、私は吃驚びっくりして、言も出ぬのことばに、女はすぐに幅狭はばせまな帯を解いた。

膝たぐへ手繰ると、袖そでを両方へ引落ひきおとして、雪を分けるように、するりと脱ぐ。……膚はだは蔽おほう

たよりふつくりと肉を置いて、脊筋せすじをすんなりと、撫肩なでがたして、白い脇わきを乳ちちが覗のぞいた。そ

れでも、脱ぎかけた浴衣ゆかたをなお膝に半ば挟はさんだのを、おつ、と這はうと、あれ、と言う間に、

亭主ていしゅがずるずると引いて取つた。

「はははは。」

と笑いながら。

既すでにして、朱鷺色ときいろの布ぬの一重ひとえである。

私も脱いだ。汗は垂たら々と落ちた。が、憚はばりながら禪ふんは白しろい。一輪ききの桔梗ききようの紫の影に

映はえて、女はうるおえる玉のようであつた。

その手が糸を曳いて、針をあやつつたのである。

縫えると、帯をしめると、私は胸を折るようにして、前のめりに木戸口へ駈出した。挨拶は済ましたが、咄嗟のその早さに、でつぷり漢と女は、衣を引掛ける間もなかったろう……あの裸体のまま、井戸の前を、青すすきに、白く摺れて、人の姿の怪しい蝶に似て、すつと出た。

その光景は、地獄か、極楽か、覺束ない。

「あなた……雀さんに、よろしく。」

と女が莞爾して言った。

坂を駈上つて、ほつと呼吸を吐いた。が、しばらく茫然としてゐんだ。——電車の音はあとさきに聞えながら、方角が分らなかつた。直下の炎天に目さえくらむばかりだったのである。

時に——目の下の森につつまれた谷の中から、一セイして、高らかに簫の笛が雲の峯に響いた。

……話の中に、稽古の弟子も帰つたと言つた。——あの主人は、簫を吹くのであるか。……そういえば、余りと言えれば見馴れない風俗だから、見た目をさえ疑うけれども、肥

大漢<sup>りもの</sup>は、はじめから、裸体<sup>はだか</sup>になつてまで、烏帽子<sup>えぼし</sup>のようなものをチョンと頭にのせていた。

「奇人だ。」

「いや、……崖<sup>がけした</sup>下のあの谷には、魔窟があると云う。……その種々<sup>いろいろ</sup>の意味で。……何しろ十年ばかり前には、暴風雨<sup>あらし</sup>に崖くずれがあつて、大分、人が死んだ処<sup>ところ</sup>だから。」――

と或友<sup>ある</sup>だちは私に言つた。

炎暑、極熱のための疲労<sup>つかれ</sup>には、みめよき女房の面<sup>おもて</sup>が赤馬<sup>あかうま</sup>の顔に見えたと言ふ、むかし武士<sup>さむらい</sup>の話がある。……霜<sup>しも</sup>が枝に咲くように、汗――が幻を描いたのかも知れない。が、何故<sup>なぜ</sup>か、私は、……実を言へば、雀の宿にともなわれたような思いがするのである。

かさねてと思う、日をかさねて一月<sup>ひとつき</sup>にたらず、九月一日<sup>いちにち</sup>のあの大地震であつた。

「雀たちは……雀たちは……」

火を避けて野宿しつつ、炎の中に飛ぶ炎の、小鳥の形を、真夜半<sup>まよなか</sup>かけて案じたが、家に帰ると、転げ落ちたまま底に水を残して、南天<sup>なんてん</sup>の根に、ひびも入らずに残った手水鉢<sup>ちようずばち</sup>のふちに、一羽、ちゃんと伝つていて、顔を見て、チイと鳴いた。

後に、密と、谷の家を覗きに行つた。近づく胸は轟いた。が、ただ焼原であつた。私は夢かとも思う。いや、雀の宿の気がする。……あの大漢のまる顔に、口許のちよぼんとしたのを思え。卯の毛で胡粉を刷いたような女の膚の、どこか、頤の下あたりに、黒いあざはなかったか、うつむいた島田鬚の影のように――

おかしな事は、その時摘んで来たごんごんごまは、いつどうしたか定かには覚ええないのに、秋雨の草に生えて、塀を伝つていたのである。

「どうだい、雀。」

知らぬ顔して、何にも言わないで、南天燭の葉に日の当る、小庭に、雀はちよん、ちよんと遊んでいる。



## 青空文庫情報

底本：「鏡花短篇集」川村二郎編、岩波文庫、岩波書店

1987（昭和62）年9月16日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二七卷」岩波書店

1942（昭和17）年10月

入力：砂場清隆

校正：松永正敏

2000年8月30日公開

2005年12月2日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 二、三羽——十二、三羽

泉鏡花

2020年 7月17日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>